

◆【海員随想】捕まる 及川帆彦

久しぶりに乗り合わせた同僚が、「佐世保で捕まっちゃってね……」と笑いながら言った。その同僚は茨城県の出身であった。

捕まったといっても、悪いことをして警察に捕まったということではない。佐世保の女性に惚れられて、結婚したということである。船員が入港した港町の女性と知り合い、恋愛から結婚に至ったケースは思いのほか多いものである。私の知っているだけでも、相当な数にのぼる。例えば、広島県の人が北海道の小樽で捕まり、鹿児島県の人が宮城県の塩釜で捕まり、新潟県の人が呉で捕まり、長崎の人が神戸で捕まり、三重県の人が横浜で捕まり……といった具合である。そんなに離れていなくても、埼玉県の人が横浜で捕まり、和歌山県の人が神戸で捕まり、といったケースもある。まさに遠くて近きは男女の仲であり、縁は異なるもの味なものである。

郷里の女性と結婚した場合は、あまり捕まったとは言わない。郷里の女性と結婚するケースが一番多いわけで、それはむしろ当然なことだからであろう。もっとも、捕まったといえは聞こえはいいが、実情は必ずしも正確ではない場合もあるようだ。男の方がより熱心であれば、捕まったというより、捕まえたというべきであろう。捕まったか、捕まえたかは微妙なところで、当事者でなければ真相は分からないというものだ。

港町で捕まった場合、所帯はその港町で持つことが多い。船員は家を留守にしているときが多いのだから、細君の親兄弟が近くにいれば安心だし、何かにつけて都合もよい。

しかし、船員の郷里で所帯を持つ場合もある。福島県の郡山の人が長崎で捕まったのだが、親の希望もあって、郡山で所帯を持った。結婚した当時の、その夫婦を私はよく知っていたのであるが、結婚後数年が経ち、子どもも 2 人生まれた。その 2 人の子どもを連れて、細君が横浜に入港した船にやって来た。私はその細君と久しぶりに会ったのだが、何と福島弁でしゃべるのである。長崎出身のその細君、つまり九州の女性が東北弁になっているのであった。これには驚いたが、しかしそれは驚くには当たらないことかもしれない。世の中には国際結婚も少なくはない。東北弁どころか、外国語を話すことになるのだから？

そういえば外国の港で捕まったという話は、寡聞にして聞いたことがない。ただ捕まりそうになったという話は聞いた。韓国の釜山と台湾の高雄である。どちらも相手の女性が、多少日本語を話せるということもあったらしい。

すべての結婚がそうであるように、うまくいく場合と、そうでない場合がある。

私の知っているなかで大変うまくいったのは、大阪で捕まった静岡県出身の航海士のケースである。相手の女性の父親というのが、複数のマンションやアパートのオーナーで、自ら不動産会社を経営する社長でもあった。細君はその父親の一人娘であった。航海士は次男であったから、婿養子になった。父親の社長はその婿がたいそう気に入って、自分の後継者にしたいと考えた。それで船員を辞めてほしいといった。細君もそれを希望した。航海士は船を下りて、義父の仕事を手伝うことになった。それから 10 年が経過して、その間に子どもも 2 人生れた。義父は、後継者も孫もできたので安心したのか、60 歳になって間もなく心不全で亡くなった。もともと心臓に疾患があったのだった。かつての航海士は、義父の事業をそっくり受け継ぎ、40 歳で社長となった。

うまくいかなかったのは、名古屋で捕まった徳島県出身の、機関士のケースである。

所帯は名古屋で持ったのだが、一緒に暮らしてみると、意見が合わないことが多く、何かにつけて諍いが起きた。そのためお互いに熱も冷めてきた。2人の結婚に細君の親は反対であったし、子どももできなかったので、別れましょうということになり、結婚後2年半ほどで別れた。その後、その機関士は名古屋に入港しても、一切上陸しなかった。別れた細君はもちろん、その身内とも顔を合わせたくなかったからである。それから3年ほど経って、その機関士は船員も辞めた。その後の消息は分からない。

「海員だより」